

峠の恋

序章

萩原 里美

暖かな陽射しが障子越しでも眩しくて、羽雪は目を覚ました。

時折、火鉢の炭が割れ、一人の空間に、ささやかな音が優しい。混じり気のない空間は、羽雪をこちらの世界に引き留めようとしているようでもある。温かい布団の中で、羽雪はこんなにも穏やかな静寂を再び味わうことができ、残すこともないと思う。

朦朧としていた意識の中、いつの間にか眠ってしまう。こんなことを繰り返しているため、目が覚める度に、また戻って来れたと考えるようになっていた。

「花魁、よろしいでありますか」

妹女郎の声が聞こえた。

「あい」

きちんと身支度を終えた格好で入ってきた。どうやら、作りたてのおかゆを持ってきてくれたようだ。

「羽雪花魁、お加減はいかがでありますか」

妹女郎は羽雪を起こして背中をゆっくりと擦る。

「ありがとうございます。心配しなくても大丈夫でありますよ」

卵がゆの隣に、昆布の佃煮が小皿に乗せられている。

「随分と気前がいいねえ。どうしたでありますか、この昆布は」

女将がこんなに気前よくしてくれるはずがない。

「後から気づいても、食べてしまえばどうしようもないでありますよ」

とぼけた顔でそう答える。方が一、女将に問い質されてもこの表情で上手くやり過ごしてくれるのだろう。しっかりした妹女郎だ。この先の星野屋も安心だ。

「つばき。あんたの作るの、おいしくって好きなんだ。元気になりそうでありますよ」

「なりそうじゃなくなってもらわないと。女将の目を盗んで何度も卵も米も、まして昆布を使う訳にはいかんせん」

軽く笑うと咽てしまった。心配する顔を宥めて部屋に帰るよう促すと、朝の風を取り入れるからと、障子を開けたまま戻って行った。乾いた風が庭一面の雪に凍てつかされて部屋に流れ込んでくる。

そのまま視線を外に向けると、真っ白に染まった庭の片隅に、牡丹の朱が色濃く映えてい